

《創立 30 周年記念に寄せて》

産学官連携活動の経緯と今後の抱負

徳島大学大学院 理工学研究部

産学官連携担当理事 杉山 茂

Shigeru SUGIYAMA

日本無機リン化学会が創立 30 周年を迎えられること、御同慶の至りに存じます。私が無機リン化学に傾倒していったのは、平成 2 年にポスドクとしてカナダ ウォータール大学で触媒の研究を行っていたときのことで、ポスドク仲間の日本人研究者がヒドロキシアパタイトの触媒活性を検討していた結果に興味を持ったのが始まりでした。研究を続けて行く過程で本会の存在を知り、Phosphorus Research Bulletin で門外漢の私は無機リンの勉強をさせていただくとともに、論文発表をしたいと思うようになりました。平成 9 年に、当時徳島大学薬学部におられましたが、お会いしたこともない嶋林三郎先生に入会希望を伝え、入会させていただきました。入会当初、本学会の敷居の高さから Bulletin への投稿に限って本会に関与させていただいていましたが、嶋林先生が平成 18 年に徳島で開催された無機リン化学討論会へ実行委員として参加しないかと声をかけていただき、多田旭男会長のもと評議員として、また、平成 22 年からは山下仁大会長のもと産学官連携担当理事として関与させていただくようになり、まともな会員活動(?)も 10 年程度となりました。

この 10 年間、本学会の先生方のお陰もあり、当初感じていた敷居の高さはかなり低くなってきましたが、完全なる部外者として入会したものと、また産学官連携を担当するようにとのご指示を受けたものとして、新参者の目で何かしなければと思いながら活動したように思います。特にその間、本学会から学術賞を頂きましたので、それに報いるためにも研究活動の活性化の点で恩返しをしなければと、絶えず考えていました。

まず、新参者の目からですが、本学会の先生方は多方面にわたる広い分野で非常に注目を浴びる成果を出されていることは従来から理解していたのですが、そのリンが無くなることにほとんど興味を持っていないことが気になりました。私自身は、良い材料を開発しても、リンが枯渇すれば何も残らなくなることに、危機感を持っていました。このようなリン資源の枯渇に真剣に向き合っている欧米と異なる状況を少しでも変えることができればと思い、材料分野の研究者も巻き込んで、リン資源確保のプロジェクトを進めて産学官の連携を深めるために、平成 23 年度科学研究費補助金新学術領域研究(研究領域提案型)を 11 名のチーム(本学会の先生方 10 名)を組んで申請しました。残念ながら採択されなかった本件を反省材料に平成 25 年度科学研究費補助金新学術領域研究(研究領域提案型)も、経済学・法律学の先生も入れた 16 名のチーム(本学会の先生方 5 名)を組んで申請しました。お気づきの通り、1 回目は本学会内での連携を、2 回目は本学会に限らず文系の方も含めた広い産学官の連携に向けての新資源確保のプロジェクトでした。しかし、審査結果によると 2 回ともその必要性は認めてくれましたが、産の寄与が少ないとの指摘を受けました。本学会には、リン関連の企業も数社あり積極的に学会活動に寄与していただいておりますが、さらに大きな産学官連携の必要性を感じていました。幸いに、リン資源リサイクル推進協議会の大竹久夫会長の御理解も得ることができ、

リン資源の啓蒙書を作成する編集委員に入れていただき、本学会の先生方を執筆者にお願いして連携を図ると主に、今まで関与することのなかった多くの企業の方とやり取りを行えるようになりました。大竹先生からはこの編集の際に構築できるリン資源に関連する産学官の皆さんとの連携を活かして、もう一度大型プロジェクト構築にトライしてみてもという提案も頂いております。本学会を中心とした大きな産学官連携の大きなプロジェクト推進に向けて、日本無機リン化学会の次の10年に少しでも寄与できればと思っています。